

書評

秋津元輝・佐藤洋一郎・竹之内裕文編著

『農と食の新しい倫理』

(昭和堂、2018年)

吉永 明弘

本書は「農」と「食」に関する倫理についての論文集である。その特色は、序章で明確に示されている通り、「既存の倫理学説の原則や規範をいわばトップダウン式に適用する原則主義的アプローチ」ではなく、農と食に関する「多種の実践を支える『倫理』を掘り起こし、食と農を結ぶ『新しい倫理』を探究していく」ボトムアップのアプローチをとっている点にある。これは食と農の倫理が「他律的な規範」と見なされることを避け、それを「日常的な生の実践」にそくしたものとして提示することを目指しているからである。本書の執筆者陣(ほとんどが農学者や社会学者であり、哲学・倫理学の研究者は編者の竹之内裕文のみ)は、上記のアプローチをとるならば当然のラインナップといえよう。

またそこには、海外の応用倫理学ではすでに始められている農業倫理や食農倫理の研究がようやく紹介され始めた、という日本の応用倫理学分野の事情もある。他方で、日本には農学者や社会学者による農と食の研究が大量にある。これらを参照しない手はない。本書は哲学者・倫理学者と農学者・社会学者との共同研究の成果であるが、この形で日本の農業倫理・食農倫理をスタートさせることはたいへん望ましいことだと思う。

第I部「農と食をつなぐ試み」は、農と食の現状に関する明快な解説(第1章)のあとで、有機農業運動(第2章)と、協同組合による「共同開発米」の試み(第3章)が紹介され、食と市民社会についての考察(第4章)がなされる。第4章の消費者と市民の区別に基づく議論は政治哲学に接近しており、特に有益である。

第II部「農と食の新しい倫理をもとめて」では、農と食の「倫理」が強く意識され、規範倫理学の理論(功利主義、義務論、徳倫理)が参照される。また農業倫理学者トンプソンの「産業的農業哲学」と「アグリタリアン農業哲学」の区別が紹介され、

後者と日本の農本主義との異同が論じられる。続いて、和食(第6章)、食育(第7章)、採集食(第8章)、動物を殺して食べること(第9章)についての考察がなされる。第9章は「肉食」や「マタギという生き方」について論じており、動物倫理・環境倫理の観点からも興味深い内容である。最後にアメリカの農業倫理学の枠組みが紹介されるとともに、日本の実践を見据えながら、産業社会における農と食の倫理の考察がなされる(第10章)。

序章でも触れられている通り、本書の中心部分は第1章と第5章である。農と食の現状から農業倫理・食農倫理への道筋が示されているので、まずはこの二つの章を続けて読むことを勧める。そのうえで第10章を読めば、それらを海外の議論と接続できるだろう。章末には「授業・ワークショップのために」というアクティブラーニング向けの「質問」が用意されている。中でも第5章の「環境や社会的正義、地域経済に配慮した『究極の夕食』を……考えて、その実現のために足りないものを議論しよう」というのは魅力的な設問である。巻末に章ごとの文献案内があるが、この中には章をまたいで何度も言及される文献がある。それらがこの分野の基本図書であることが自然に分かるようになっている。

全体を通して、農学の研究者たちが倫理学や政治哲学の枠組みを積極的に参照しているのが印象的であった。終章で「応用科学は価値判断の学問である」と明言されるなど、倫理や価値は農学にとって遠いものではないようだ。他方、哲学者・倫理学者が農学に精通するのは難しいかもしれない。だが、少なくとも「多種の実践を支える『倫理』を掘り起こし、食と農を結ぶ『新しい倫理』を探究していく」ボトムアップのアプローチを哲学者・倫理学者が試みる価値はあると思う。本書の第9章はそのような観点からも評価できる。